

論文審査の結果の要旨

氏名 溝部 良恵

唐代は、中国で初めて本格的な虚構の物語が自覚を持って制作された時代である。従来の研究は、中唐期に発生した伝奇と呼ばれる作品を主たる対象としてきたのに対し、溝部氏は伝奇勃興以前の作品こそ、中国小説史の研究に重要な意義を持つと考え、『紀聞』『広異記』という二つの小説集を取り上げ、総合的な研究を行った。その成果は、小説研究の二つの異なる側面から見る事ができる。ひとつはテキスト校訂の問題に指針を示したことである。唐代小説は原書のほとんどが失われ、北宋初めに編纂された『太平広記』に収録され今に伝わる。しかし現存する最古の『太平広記』は、明代(16世紀半ば)に刊行されたものであり、その本来の姿に近づくことの難しさが指摘されてきた。溝部氏は、15世紀半ば、朝鮮王朝の文人官僚によって、『太平広記』のアンソロジー『太平広記詳節』が編集刊行されたという事実いち早く着目し、韓国に赴き、調査を実施、この書が唐代小説の研究にとって大きな意義を持つことを明らかにした。また中国国家図書館において調査を行い、これまでに知られていない『広異記』の抄本数種を発見した。これらはいずれも『太平広記』をもとに明清代に作られたものではあるが、他の諸本との比較によって、有力な資料となりうる事が具体例を挙げて示された。

第二はテキスト読解の面での成果である。『紀聞』の一篇「呉保安」は、その長さや複雑な筋により、唐代初期の作品の中では、伝奇的性格の強いものとして、高く評価されてきた。しかし溝部氏は、主人公呉保安の描写がごくわずかしかないことなど、この篇にはアンバランスな点があると考え、関連する資料の記述と合わせ、作品を詳細に分析した。そしてこの作品の価値は、物語叙述の巧みさ・おもしろさにあるのではなく、むしろそれを逸脱する形で、主人公呉保安の一途さが描き出されている点にあると述べ、人間の本質を観察する作者の視点は、『紀聞』の大半を占めながら、従来殆ど取り上げられることのなかった志怪風といわれる短篇においても、個性的な作品を生み出していることを指摘した。

次に『紀聞』『広異記』及び六朝の『異苑』という三つの書から、よく似た筋立てを持つ三篇を取り上げ、場面ごとに比較分析を行った。その結果、事実を記録するという立場で記された『異苑』とは異なり、『紀聞』『広異記』の二篇は、短いながらも虚構の物語を作ろうとする意志が明確であることが示された。またこの二篇を比較し、これまで「呉保安」を持つ『紀聞』に比して、小説として劣ったものと見なされてきた『広異記』所収の話の方が、主人公の知り得たもののみを描くという叙述方法が一貫していること、物語の中の時間を意識し、描写の粗密によって、その流れを制御しようとしていることなどの点で、『紀聞』の類話より、物語の技法に進んだもののあることを明示した。

溝部氏の研究は、「呉保安」のように伝奇の先駆けとされてきたものよりも、むしろ従来無視されてきた初期の零細な作品において、虚構の物語を作るための多様な試みが行われ、それが伝奇の勃興を準備したことを初めて明らかにしたものである。テキスト校訂の結果が読解の際に十分生かされていないこと、テキストの分析にやや緻密さを欠く箇所があることなど、残された課題も少なくないが、唐代小説史の枠組みに見直しを迫るに足る事実を提起し、テキストの校訂・分析の両面において、小説研究の精度を著しく向上させる可能性を開いたという点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。